韓国生物学の恩人、故森為三教授

朝鮮ソウル大学教授　姜　寿　遠

姜寿遠教授は森為三博士の死去を惜しんで朝鮮ソウル農科大学新聞、第522号（1964年1月2月）に次の文を朝鮮語で寄稿されました。訳しまして再録をいたしました（室井綽謹記）。

森為三教授は、その一生を韓国生物の為にも、確かに36年間、努力せられました。彼が来韓した明治44年（1911）といえば、韓国は勿論のこと日本や欧米各国も近代生物学の幼年時代であった。この時より植物界と動物界全般（特に魚類）を対象として韓半島の隅々まで、そして遠く満州、シベリヤ、蒙古及び中国各地の高山幽谷、湖沼海洋、砂漠荒野に至るまで彼によって踏査されない地はなかった。彼は実に韓国生物学の開拓者であり父であり、広義における生ける辞典であり博物家であった。今は故人である石宙明（蝶）、南泰郷（鳥）、福成博士（昆虫）などの先輩にあたり当時の錚々たる生物学の現役陣や現今の元老格としての人々は多少なりとも彼と関連のない人は殆んどいない。

彼は早く青年教師（27才）として当時唯一の官立中学校（現在の京畿中高校の最初の校名）に赴任せられた。そこで注目すべき活躍をせられて欧米留学を終え15年後に創立した京城帝国大学の予科教授に栄転せられた。彼は教育者であり学者としての良い環境に恵れて希望に燃えながら研究せられた。自ら主動となり朝鮮博物学会を創立し育成して多忙の毎日を迎えられた。彼は半島をせましと大陸の各地を数次採集旅行をせられた。また講習会を開催し、研究を重ねて成果を続々と発表せられた。当時の博物会誌を創刊号より数十号に至るまで会誌を満して品位をたかめ各分野にわたったが、特に魚類に関してすぐれたことは、新種のみ22種に達せるをみてもわかる。そして至宝の如き尨大な文献を蒐集して多くの標本（植物、昆虫、魚類および化石など）とともに、文字通り韓国生物界の縮図であった。

解放（註、1945年）してからは、故郷の日本の兵庫に帰って兵庫農大の老教授（62才）として、その後は武庫川女子大学に重責を負った。それから2年後（1947年）兵庫生物学会を創立して逝去する時まで会長として学会を育成なさった。そして地方学会として確固たる位置を築いた。若い人がとても、かなわないまで勤勉である彼は韓国魚類に関する貴重なる論文を多く発表して東南アジアの鯉亜目の系統史をたえず研究せられた。それのみならず1952年には68才の高齢でよく標高1,000mの妙高山を若い会員と共に登りつつ、親しく野外指導をなさった。そして山から海まで会員とともに採集し、キャンプ生活を通じて生物指導は勿論のこと、高い人格をもって真の教育をなさった。学会の財政難をみては軽く巨額を寄付せられたのも一度や二度ではなかった。規定の手当も旅費も凡てを受けず謝絶したという。一地方会誌である兵庫生物誌が中央にまで高く評価せられたことは決して偶然のことではない。

一昨年の秋より軽い貧血症で時々入院せられたが、彼は皇太子夫妻の前での御前講義の準備に多忙なスケジュールの為に無理が重なるようであった。しかし定った日、日本人学者としては一生の最大の栄光の日はついに来た。昨年の正月から3月まで3回に渡って皇太子夫妻、各大学及び研究機関の水産専門家達の陪聴する内に「東南アジアの鯉亜目の系統発生進化分類および分布とその要図」という題目で平素の蘊蓄を傾けて成功裡に御前講義を終えた。

進講後緊張がゆるんだせいか貧血症の悪化で7月11日神戸医大病院に入院したが、つづいての極度の病勢が傾き11日午後10時30分に79才を最後に逝去せられた。一度訃告が発表せらるるや、全国学界の哀惜の声高く告別式においての会員代表の弔辞は、はらわたをちぎるように哀切を極めた。又彼の感化や美談逸話は博士の平素の高邁な人格のしからしむものであった。

一方彼のこのような成功の裏には平素茂子夫人の内助の功の厚い事も察せられる。茂子夫人は弔慰金中、いさぎよく100,000円（日貨）を学会に寄付された。これに感謝した当会では、これを基金として『森為三博士生物研究奨学会』を創り、毎年一人の有能会員を養うことになったという。

筆者が博士を知るようになったのは淡水魚に関心を持ち始めて西湖の魚類を勉強する時、文献上において始まる。今より6年前、西湖の特産魚である西湖ナブチュルガンイ（Pseudoperilampus hondae）の標本に対する質疑する件に始まった。彼は韓国の高原地方や山村の渓谷に住んでいる七色マス（ニジマス Rainbow trout）ウグイを養殖して外貨獲得に利用することをすすめられ、また韓国生物界の発展を祝福せられた。そして李政権の時より韓日国交の正常化を誠心祈られた。また日本

生物界の事情をありのままに伝えられた。筆者個人にも西湖の魚のどの分野を如何に研究した方がいいとか、それから文献は何処にある筈だとか、老大な毛皮を始めとして標本は8箱に余る文献も一つも持って帰国できなかったが、どこに置いたかそれを某方が知っている筈だとかまで、手紙をいただきました。筆者の在米時代（1959—1961）には、また訪問すべき大学、研究機関および学者達を紹介して下さって、何を学んで来たら、国に貢献できるかという事までも親切に教えられた。帰国の途、日本に寄り必ず彼を訪問し、手紙に結縁せる間柄をあつくする筈であったが、明日の事も知らない無常な人間である筆者は事情により近い将来にゆずり、そのまま帰国してしまった。今日今やどこで先生に会えることか。博士の業績は知る人ぞ知るという通りですが、彼の貴い業績を広く公表し、出来れば務めて国家の名儀でもって功労賞でも授けたいものである。